

## 演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 3号

12月24日(火)

【岐阜】	岐阜農林高等学校
人(やね)	
<p>物語の舞台は美濃農林高校七草寮。そこで生活する寮生や先生たちの一年間を描いた話だった。まず最初に舞台に置かれている寮の扉を黒子が動かし、同時に役者も動くことによって映画のカメラワークのような視点が味わえた。また、その扉の裏と表を使い分けることによって建物の中と外の区別を分かりやすくしていた。照明や音響は、全体的に役者とのタイミングが合っていた。音響では特に、ピアノを演奏する場面で実際にその役者が演奏しているように感じられた。照明では、最後の場面で背中合わせになっている芽衣子と明にスポットライトが当たることによって、二人の何かに挑むために寮を旅立っていく姿が重なったように見えた。</p> <p>多くの登場人物がいたが、まとまりがありチームワークの良さを感じた。特に、最初の扉を動かす場面や劇中のソフトボールの場面など、役者同士が合わせてセリフを言ったり動いたりするような所からは豊富な練習量が見て取れた。</p> <p>劇中にソフトボール大会の場面を挟むことによって、一年間の時間の経過を分かりやすく表現していた。また、ホームベースは寮を比喻していると考えれば、寮は寮生にとってのホーム＝家であり、いつでも帰ってくる場所だと解釈した。卒業式で三年生を送り出す最後の場面では、三年生が客席に背中を向けていたことで観客も一緒に寮生に送り出されているように感じる事が出来た。</p> <p>この劇のテーマとして「家族の在り方」「次に進むことの大切さ」「人と人が支えあう」ということが挙げられた。「家族の在り方」は、本当の家族ではなくても寮生のことを家族だと思って接している点や、親子の関係性が描かれていた点からそう考えられた。「次に進むことの大切さ」は、ソフトボールのホームベースは逆走できないという点や、登場人物の過去が明確にされていないという点から考えられた。「人と人が支えあう」は、題名の『人(やね)』の「人」という漢字が人が支えあっているように見える点や、高山君の事件をきっかけに寮生たちが他人を見ていこうと行動を起こしている点から考えた。</p> <p>登場人物の背景は詳しく描かれていなかったが、そのことによって観客が様々に想像することができ、親子や家族の在り方について深く考えさせられる劇だった。</p>	